

海の失格者とその行方

——コンラッドの『ロード・ジム』について

秋葉敏夫

(一)

ジョウゼフ・コンラッド（一八五七——一九二四）にしては珍しく、彼の作品『ロード・ジム』に、その元となった草稿がごくわずか残っている。それは冒頭のほんの二章に関するもので、長さも決定稿の半分程度と短かい。両者を比較すると、ほとんど同じ文章、同じ語句も散見されるが、作品理解の上では、とくに決定稿に付け加えられるか詳述されるものに、作家の意図が伺われて興味深い。この草稿でも、主人公ジムの想像力に関する言及があるが、彼の悲劇の一大要因ともいえる、自己英雄視の記述は少しも見られない。決定稿では、少年期からのその夢想がかなり強調される。一つの挿話⁽¹⁾として、高級船員を指す訓練船で、彼が臆病のため英雄になれない屈辱的な出来事⁽²⁾が描かれるが、これは決定稿で初めて付け加えられたものである。そして、草稿にも同じような叙述が見られる、「やがて、まだとても若いのに、彼は例の海の出来事の試験を受けずに、すばらしい船の一等航海士となった。人間の内面的価値や、その気性の一部と本質そのものを白日のもとに示してくれる試験、その上、抵抗力の質と見せかけの裏の真実をさらけ出す訓練は受けずに⁽³⁾」という説明は、すでにジムの不安な行く末を暗示させる。

「作者の覚え書」のなかで、コンラッドは二〇年ほど前を振り返り、次のように書いた。つまり、「真面目な話ですが、本当のことをいい

ますと、私の最初の考えは巡礼船の出来事だけを扱う短編小説で、けつしてそれ以上のものではなかったのです。ただ、その着想は本格的なものでした⁽⁴⁾」と。そして、当時のいくつかの手紙が『ロード・ジム』執筆時の作家の意図や経緯を興味深く物語る。それらによると、最初の構想時の題名は「ジム、一つの素描⁽⁵⁾」で、雑誌二回分の二〇、〇〇〇——二五、〇〇〇語の作品だったこと、雑誌掲載後には、ほかの短編（題名だけで、結局書かれなかったものもある）とともに、一卷の短編集に入れる考えだったことがわかる。ところが、収録される仲間の作品が、すでに出来上った短編「青春」（一八九八）と中編『闇の奥』（一八九九）になり、『ジョウゼフ・コンラッド作、三編の物語』などと、その短編集の題名まで提案される。この三つの物語は、それぞれ同じ倫理問題から（私の例の錯覚にすぎないでしょうか）構想されていますが、（その意味で）同質の作品集になるでしょう⁽⁶⁾」ということばも見える。「青春」と『闇の奥』に登場する語り手マールウが『ロード・ジム』に導入される理由や、当初作家の意図したこの作品の主題の性質が、それとなく推測できる。短編のはずの「ジム」はますます長くなり、やがて独立した単行本としての出版が提案される。ただし、巡礼船事件と裁判だけの物語が、中盤以後、なぜ外部世界から隔絶された未開の奥地に舞台が移るのか、その理由は手紙からはわからない。結局「ジム」は、題名も『ロード・ジム』、一つの物語』と変更され、最初の予定の五——六倍の長さ、およそ一二

○、○○○語の大作になった。

長編『ロード・ジム』の完成は一九〇〇年七月だが、コンラッドがその執筆に本格的に取り掛かったのは前年の二月のことらしい。彼の場合、その頃は作家稼業を始めて四年ほどたっており、すでに彼は長編三編と中編一編、さらに六つの短編を書き終えている。そして、これらの作品で扱われる主要な問題が、多かれ少なかれ、その直後の『ロード・ジム』でも繰り返される。処女作『オールメイヤーの阿房宮』（一八九五）や次の『鳥の流れ者』（一八九六）における、自己愛が強く、夢に押しつぶされ、破滅する人物像はジムの場合にも当てはまる。また、それら二作で触れられる、政治の駆け引きと醜悪な実体は、ジムが未開の奥地で直面する問題でもある。あるいは、『ナーシサス号の黒人』（一八九七）や『青春』のような、海の物語群の中心課題、沖合に出た船上での海による試練の問題は、ジムの犯した巡礼船パトナ号事件に関連している。それに、『ナーシサス号の黒人』ではやや曖昧だが、中編『闇の奥』で顕著になる、人間悪ともいうべき人間精神の暗い側面の認識が、ジムの逃れられない真実として彼を決定的に打ちのめす。大ざっぱない方だが、『ロード・ジム』はただ長いだけでなく、作家コンラッドの当時の問題意識を集大成した作品に近い。

およそ二〇年ほど前、『ロード・ジム』が再び映画化されたことがある。それは日本でも上映されたが、宣伝のわりには、あまり評判はよくなかった。なるほど変化に富んだ物語とかなりの活劇部分を含むにせよ、『ロード・ジム』はけっして映画向きではない、精緻な心理小説である。そこには、映像化しにくい人間の内面のドラマが基調にあり、人間の本質をめぐって展開する、意識する自分と心中のよそ者との闘いが主流になる。アルバート・J・ゲラードのことは借りて、それを、「意志と性格の葛藤、無意識の心に裏切られる意識している心、行為によってばかげたものにされる意図などの劇的イメージ」と

いつてもよい。主人公ジムの物語は、基本的に、自分自身の心に見る、人間精神探究の物語である。そして、もう一人の主人公、語り手マールウの行為も、ジムの精神的苦闘とそれに関連する人びとを通した、人間の本质探究の物語になる。

もちろん、こういう探究が簡単に進むわけではない。表面の物語自体は比較的単純でも、読者を巻き込むその探究は、効果や皮肉を頼りとした、複雑かつ入念な方法で行われる。長編『ロード・ジム』には小説技法の実践者として、まさに作家コンラッドの面目躍如たるものが見える。例えば、読者を現実の体験と同じように感じさせる、語り手の話、視点の移動、時間の逆転などが使われる。また、象徴、比較対比、伏線などの援用もたくみである。脱線的な出来事の導入や小さなものごとの描写も、主題の解明に関連し、役立つものが多い。実際、ヒュー・クリフォードの次のことばは、作品の構成を端的にとらえているだろう。一九〇四年、『ロード・ジム』の紹介文で、彼は次のように、「なにか繊細優美なモザイク画、それを構成する無数の、ちっぼけな細片の一つ一つが全体に不可欠な、そういうモザイク画ほどびつたり、『ロード・ジム』が似ているものはない。これは文章ごとに、各節ごとに、ほとんど単語ごとに築き上げられ、どの句を欠いても、その作品はひどく傷つけられ不完全になるだろう」と書くのである。この小論は、そういう『ロード・ジム』の小説技法を手掛りに、作品の主題を、とくに海の物語としての側面を重視し、人間形成における自己認識の問題と、この世の「舵取り」の方法について論じるものである。

(一)

一八八〇年八月、紅海で、海運業界での大きなスキャンダルに発展する、信じ難い事件が起きる。つまり、嵐の最中、ボーラーの故障と

浸水に直面する船から、船長や他の高級船員たちが九五〇人ほどの巡礼客を置き去りにして逃げたというのである。ところが、その船、ジエダー号は間もなく発見され、無事に近くの港に曳航される。作家コンラッドの場合、自己の体験や現実の出来事を作品の素材に使うことが多いが、彼は『ロード・ジム』のなかで、このジエダー号事件をまともに利用する。とくに、『ロード・ジム』の最初の構想が「巡礼船の出来事だけを扱う短編小説」だった故に、前半の物語はほとんどその事件をめぐって展開され、海の物語の色彩が濃い。ここでは、立派な船乗りの資格とは何か、といった問いかけが基調にある。つまり、船乗りの責任感と、勇気や臆病に関する問題が提出される。また、的確な判断や迅速な処理能力と、自信ある行動力についての見直しが含まれる。主人公ジムの大きな欠点、彼の夢想癖と並はずれた想像力が、そういう問題をくつきり浮かび上がらせる。

ジムは海の男として立派な体格を持つ、二四歳の青年である。彼は何代も続く牧師の息子で、二年間の訓練船時代にも優秀な成績を残した。また彼自身も、その時、未来の自分の英雄的な働きを夢見ている。そして若いのに、一、四〇〇トンの地方船、パトナ号の一等航海士になり、さっそうと任務を遂行していた。ところが、今、そんなジムを被告として、東洋のある港町で海難審判が開かれている。彼の罪状は、八〇〇人の巡礼客を乗せるパトナ号が沈没する危険にさらされた時、他の高級船員たちとともに乗客を放ったかして、その船から逃げたというのである。ジムの弁解によると、浸水し始めた船で、彼は衝突隔壁が水圧に押されるのを見る。そして彼は、この老朽船が間もなく沈没すると判断し、船体の大きな揺れで恐怖にかられ、卑劣な船長たちの準備した救命ボートへ、ほとんど無意識のうちに飛び下りてしまったらしい。だが、パトナ号は沈没を免れ、通りかかった船によって近くの港へ曳航される。人びとの注目するその海難審判の結果は、ジムの場合も、他の乗組員と同じく、「船員免許取り消し」というもの

だった。

ジムは語り手のマールウに対し、船を離れた時の状況を詳しく説明する。乗客の数に比較して救命ボートは少ないし、救出のための時間の余裕もなかったろう、と彼はいう。その時すでに、嵐の前触れで、空は黒い雲に覆われてきたのである。彼はまた、逃げるつもりはなかったのに、船長や他の乗組員に仲間と間違えられ、急ぎ立てられて跳び下りてしまったらしい、と振り返る。そして、パトナ号の船の灯りが沈むように消えなかつたら、ボートからもどつたらうとさえ付け加える。このあたりの説明では、孤独で、自分の気持ちを理解してもらいたいジムは、かなり弁舌さわやかである。しかし、多弁はものごとを曖昧にしたり、疑惑を深めることがあるだろう。そのことはこの場面のジムにも当てはまり、彼の弁舌は説得力の弱い、勝手な自己弁護にすぎなくなる。例えば、ボートに乗り移つてから、自分は船長や他の乗組員とは離れており、彼らとは違う人間だと強調しても、事実は厳しくそれを否定する。物語の冒頭で、すでに、何かの事実を追いかければ、東洋の港町を転々とするジムの言及がある。たとえ表面的な理解でも、その真相究明の展開は、読者の興味をかきたてるのに充分だろう。

主人公ジムは海の失格者である。パトナ号事件は、彼に対し、そのことを発見させる一つの試練に近くなる。実際、自分勝手や臆病、あるいは乗客の信頼を裏切る無責任は、船乗りとして言語道断の行為である。立派な船乗りの資格は、いわば、ジムの行動を裏返せばよいだろうか。彼自身、パトナ号事件での行為を苛立ち気味に認めざるを得ず、その深い屈辱感を味わう。また、以前から夢見ていた自分に欺かれる、彼の無念さも強い。ジムはいかに海の失格者、成熟以前の若い人間なのか。この問いかけに答えるかのように、物語の前半は、皮肉や批判の効果を借りて、たくみに進められる。

ジムの欠点は、訓練生時代からの並はずれた想像力である。しかも、

それは確さに欠けていて、現実に即していない。作家コンラッドは、この作品の草稿にも見えるものだが、物語の冒頭で、「想像力、それは人間の敵で、すべての恐怖の父」と書く。ただし、この思いは、想像力を建設的、創造的な働きにとらえない点で一面的であり、たぶん海上勤務の視点から述べられていると考えられる。沖合に出た船上は、いわば行動の世界である。そこで問われるのは、例えば勇気や忍耐などのほかに、的確な予測と決断に基づく迅速な行動だろう。ジムはものごとに対し情緒的反応は敏感だが、知的反応は乏しく、現実に対処する行動がとれない。そして彼自身、結果的には、自分の想像力に裏切られるかたちにもなる。エロイーズ・ナップ・ヘイは、ジムの想像力に関し、次のように正しく要約する。

……ジムにとって、「想像力」は二つの顕著な特徴を、実際、二重の性質を持っている。一方では、自分自身のありえそうな英雄的行為を想像して、いわば彼は「現実」から遠ざけられる。他方、緊急事態が発生すると、彼の想像力はまったく制御できないほど恐怖を拡大する。この能力の両面が一緒に働くと、彼は経験に対応するた
め必要な運動神経の反応を奪われてしまう。

そしてパトナ号事件で、船乗りとしてのジムの資質が実際に試され、その多くがあらわにされた。だが、その事件以前に、事態の突発、緊急性などの点で、似たような出来事に彼はぶつかっている。それも彼にとつて、敗北感を味わわれた苦い経験である。訓練船時代、ジムはしばしば自分の英雄的な働きを夢見ている。ある暴風雨の夕暮、衝突事故の乗組員を救うため、練習生たちはカッター船に殺到する。ジムも急いで甲板に向かうが、荒れ狂う風雨と潮流をちらっと見て、彼は困惑したかのように動けなくなってしまう。「彼は立ちすくんだ」ということばが、意味ありげに繰り返される。結局、彼はその船に乗

れず、救助に参加できない。物語の冒頭（書き出しから八〇〇字ほどのところ）で紹介されるこの出来事は、ジムの性格を端的に示し、パトナ号事件への見事な伏線となる。

ところで、長編『ロード・ジム』には多くの人間が登場する。そのうち、脇役的人物の描写も鮮やかで、アルバート・J・ゲラードは、「二流、三流の脇役に関するコンラッドの成功は……『ロード・ジム』で記録される重要な前進の一つである」と書く。彼らの多くは、それぞれ、主人公ジムの行動に照応し、ある者はそれを批判的に映し出す。ほんの三〇〇字程度で扱われる人間も、それ故、時には見過せない意味を持つてくる。例えば、パトナ号のマライ人操舵手二人が海難審判で証言する。その事件の時、一人は何も考えなかったというが、もう一人は、何か悪いことが船に落ちかかるのを感じたこと、命令はなかったし、どうして舵輪を離れられるかと答える。彼にとつて、白人たちが死の恐怖から船を離れるのは思いもよらないことである。しかもこの操舵手が、海で何年も白人に尽くして多くの知識を得たと自慢するのを、作家コンラッドはたくみに付け加える。

また、勇気や責任感をまっとうして、船と一緒に沈んだポップ・スタントンの例ほど、主人公ジムの船乗りとしての未熟さを、端的に、しかも痛烈に批判するものは少ない。この場合も、わずか三〇〇字ほどで紹介される話である。一等航海士スタントンは、セフォラ号の衝突事故の時、一人取り残された小間使いを救い出すため甲板にもどるところが、狂乱した女は欄干にしがみつき、ちびのスタントンには彼女を引き離すことができない。彼が警戒しながら救出策を考えていると、突然、船は沈没し、その後は何も浮かんでこないののである。話の中味はただそれだけだが、この脱線も、立派な船乗りの勤めがどういうものかを暗示している。そして、小柄な一等航海士スタントンの行動も、パトナ号事件でのジムの態度と好対照で、その後のジムの煮え切らない弁解を、幼稚で滑稽なものにするではないか。

主人公ジムの態度と比較される、興味深い脱線話がもう一つある。この挿話は、パトナ号を曳航したフランス軍の副艦長に関するもので、前の二つにくらべて、やや長い。そして彼の体験談は、ジムが逃げた後、現実に三〇時間パトナ号に乗っていたということで、ジムの臆病さや卑劣さをいやがうえにも際立たせる。当時の状況、例えば衝突隔壁の様子や気象条件、あるいは船内の混乱への恐れなどは、二人の間で、たいして変っていない。ところが、ジムにとつての問題箇所は、その老練な副艦長には、ただ普通の注意事項にすぎない。彼は自分とジンを同一視しないし、ジムの予想外の行動には、その若さを斟酌する余裕さえ持つ。パトナ号を曳航する時、彼は衝突隔壁の状況を注意し、船が沈む場合に引き綱が切れるよう、斧を持つ操舵員を配置させる。それも船乗りの当然の勤めとして、事態の急変に対応する用意周到さの現れにすぎない。彼の信念はその場でできるものを確実に行うことで、彼はいわば堅固な船乗り魂と忠実な職業意識を体現する。そしてこの副艦長に見られる、ものごとの的確な判断と、それに基づく沈着冷静で、勇気ある迅速な行動は、ジムの場合と雲泥の差である。しかも、彼が凡庸な人物と描かれるだけに、英雄的な行為を夢見ても、現実にはその逆になってしまう主人公ジムの態度は、見事に皮肉られ、厳しく批判される。

そして、作品『ロード・ジム』は人間の本质に関する探究と認識を扱っている。主人公ジムは、気が進む、進まないは別として、自分が海の失格者であることを理解しなければならぬ。また、それと同時に、彼は自己の内部の意識に目を向け、人間精神の暗い部分と出会わなければならぬ。その上、パトナ号事件での臆病や自分勝手な裏切りによつて、ジムは周囲の人びとを不安に陥れる。物語の展開部は主としてその経緯の叙述になるが、人びとはジムの影響力のもとで、人間への懷疑や不信を抱かざるを得ず、やがてその矛先は自分自身に向けられる。海難審判の陪審員の一人、ブリアリイ船長は、失敗や事故を起

こしたことの無い優等生で、あまりにも純粋なため、ジムとの絆を意識しすぎて、その判決の後、自殺する。傍聴者だった語り手のマールウも、同情と批判の気持ちでジムに接しながら、彼が普通の対象物ではなくなつてくる。マールウ自身も自分の心に懐疑の目を向け、人間悪の可能性を示したジムが自分の分身のように感じられる。実際、この人間精神の暗黒面に関する認識は作家コンラッドの本質に触れるもので、その認識過程は見事な小説技法の援用によつて、無理なく進められている。物語前半の中心であるパトナ号事件は、結局、人間の実体を見直す格好の契機となり、とくに若いジムにとつては、彼自身の人間の成熟に関連する。長編『ロード・ジム』は海の物語として出発したが、その特徴が後半まで自然に流れ、この作品は主題の点で、海の傑作短編「秘密の共有者」(一九一〇)に非常に近い。

(三)

およそ二〇年の船乗り体験を持つ作家コンラッドは、海が主な舞台になる作品をいくつか書いた。それらは短、中編がほとんどで、その数は全作品中、二割にも満たないだろうか。それでも、海のすぐれた描写とその特殊な題材から、彼はしばしば「海洋小説家」というレッテルを貼られた。晩年になると、彼はそう呼ばれるのを嫌い、自分の海の作品に関して、例えば次のように弁護する。

作家生活も二二年を過ぎますが、私の作品があまりうまく理解されていらないといつても、おそらくあなたは私が生意気だとは思わな
いでしよう。私は海の作家、熱帯の作家……と呼ばれてきました。
しかし、実際のところ、私のすべての関心は、ものごとや出来事や
人びとの「理想的な」価値にあったのです。ただそれだけで、ほか
のものには少しも関心が沸きませんでした。⁹⁸

「青春」はすばらしい海の物語だといわれてきました。そうでしょうか。ここで、基本的な問題を議論して、あなたをうんざりさせようとは思いません。けれども、海の出でくる私の物語は、別の角度から見てもよいはずで、『黒人』のなかで、私は一群の人間たちの心理を扱い、自然のある側面を描いています。でも、そこに現われる問題は海の問題ではなく、それはただ船上で起こった問題にすぎません。船上での条件は陸の全錯綜物から完全に孤立しているので、その問題は、特殊な力と色彩を帯びて、くつきり浮かんでくるのです。

右の引用は、どちらも、作家コンラッドが友人あての手紙に書いたものからである。それはただ個人的な発言で、すべてを信用する必要はないが、的を射ている部分もかなりあると思われる。そこで、この説明を作品『ロード・ジム』に結びつけると、パトナ号での出来事は陸上の社会にも当てはまる、海の失格者は陸上でも成功者にはなりにくい、ということになる。『ロード・ジム』の後半では、その主旨を証明するかのようになり、出来事は完全な陸上の出来事、舞台はマライ半島の奥地、パトウーサンへ移される。そして、物語の雰囲気は、島に変わって、がぜん活劇調になる。そこでは、部族間の政治的、経済的抗争と、それによる戦闘があり、また他方には、純粋な恋愛も加えられる。個人と個人の信頼や、部族との社会的関係からの義務感、責任感といった問題も生まれてくる。環境はまったく異なっても、主人公ジムを取り巻く状況は、一等航海士だったパトナ号の時点と類似している。彼はこのパトウーサンでは勇敢に振る舞い、そこに平和を取り戻し、秩序の維持に奔走する。そして、白人の彼は原住民の信頼と尊敬を得て、彼らから「ジム閣下」と呼ばれるほどで、忌むべき過去を持つジムも、どうやら成功したかに見える。

リチャード・カールは、作品『ロード・ジム』について、「それは運命を決する予期しない臆病な行為のための、後悔と、自尊、回復努力の物語である」という。この意見はかなり表面的で、少し誤解もありそうである。主人公ジムは最後まで自尊を失ったことはなく、彼が気にするのは自分に対する人びとの眼である。彼は人びとの不信や軽蔑から逃げていた。それ故、この作品を「後悔と名誉回復努力の物語」といった方が適切になる。ただし、その考えも、ジムのパトウーサンでの活躍を重視した結果で、不十分なことはいうまでもない。実際、長編『ロード・ジム』には構成上の弱点があり、例えばアルバート・J・グラードの論じるように、パトウーサンでのジムの冒険は本質的なジムとはあまり関係がない。物語の前半は、パトナ号事件をめぐるジム自身の衝撃と、それを契機とする人間精神探究が中心である。その真面目で、かなり重苦しい雰囲気は、物語の中盤以後、全体の約三分の一の活劇的な部分を通り越して、終結部の、パトウーサンにおけるジムの突然の死の経緯を扱う部分と通じている。たとえ一時的で、幸運の助けを借りたものであれ、成功の度合が高ければ、破滅の実態もそれだけ強められる。パトウーサンでのジムの活躍ぶりは、その後の彼の死とその意味を引き立て、たくみな構想ととらえる方がよいのではないか。

主人公のジムは、本質的に、かなり単純な人物である。彼の性格は様々な体験にかかわらず、自分の死の契機となる事件まで、ほとんど成長していない。その事件での敵対者、悪漢、ブラウンは、「奴に目を向けた瞬間、どんなばかかすぐわかった」とジムのことを思い出す。また、パトウーサンの貿易会社の前哨所主任、コルネリウス（ジムは彼の後釜として同地に赴いた）は、「奴はばかも同然さ」とか「奴は幼ない子供みたいだ」とわめく。彼らはともに手練手管にたけた狡猾な人間で、ジムの嫌悪する者だが、そのことを割り引いても、彼らの批評は決して大きな誤ちではない。作品『ロード・ジム』は、主人公

の性格的な単純さ故に、長編の持つ主題の興行や横への広がりより、むしろ小説技法のたくみさの目立つ傑作だろう。活劇調の物語部分に単純な人物はよく似合い、そこでは、作品の主題が一瞬忘れられるかに見える。しかし、例えばジムの恋人が語り手のマローウに、彼はよい人間か、信頼できる人間か、と尋ねる箇所がある。この問いは、彼女自身にはただそれだけの意味でも、パトナ号事件の経緯を知る読者には、作品の基調にある、人間の実体を探る姿勢を思い出させる。その場面は、主題の流れとして、次の終結部に続き、主人公ジムの思いがけない死を導く事件への、一つの橋渡しとなる。

舞台がパトナ号に移ってから、時間はおよそ二年ぐらい経過している。今はもう、主人公ジムに対する原住民の信頼は絶大で、彼なしでは部族の意志がまとまらないほどである。ところで、それからさらに一年以上たつてから、語り手のマローウはジムの死を突然聞かされる。彼の興味はジムの死の経緯だが、しばらくして彼は、その張本人というべき悪漢ブラウンから、話を聞くことになる。

食料強奪のためパトナ号に紛れ込み、退路を塞がれた悪漢ブラウンと、主人公のジムが対決する。ジムの精神にとつて、それは二度目の大きな試練になる。しかも、ものごとを作品の主題に結びつけられ、パトナ号事件の「過去」が、悪漢ブラウンの出現というかたちで、彼を追いかけてきたのである。作家コンラッドの使う人物の象徴性は、そこで見事な効果を発揮する。ジムは悪漢ブラウンの巧妙な弁舌にうろたえる。それはなぜか。彼はブラウンの話を介し、自分の真の姿を見るからである。今は病床でやつれていても、悪らつさを彷彿とさせる悪漢ブラウンの次のことばは、作品『ロード・ジム』に見られる雄弁の一つだろう。

「……『おれたちが会ったのは、互いに身の上話をするためか』とおれは奴に尋ねた。『どうだ、お前から始めたら。いや、おれだつ

てなにも、聞きてえわけじゃねえ。ちゃんと胸にしまっておくんだな。どうせ、おれよりましなわけはあるめえ。おれは生きてきたよ——お前だつてそうだ、お前はまるで翼があつて、汚ねえ大地には触れねえ人間みていな、話しぶりだがな。そう——汚ねえさ。おれには翼なんぞありやしねえ。おれがこんな所に来たのは、今まで一度、おつかねえと思つたことがあつたからよ。それが何だか、知りてえか。刑務所よ。そいつにはどうも弱くてな。覚えておくといいかもしれねえ——お前の役に立つかも知らんよ。お前が何におびえて、こんなひでえ所に隠れているのか、聞かねえでおいてやろう。こじや、けつこううめいものを見つけたらしいけどな。そいつがお前の運で……』……」

悪漢ブラウンは、パトナ号事件のことは一言も口にしない。ただし、この引用のすぐ前には、「同じ船には手下どもがいるんでね——それに、神様に誓うが、おれは災難から跳び出して、仲間を見殺しにするような人間じゃねえ」と彼はいい、そのことばは主人公ジムの「過去」に微妙に触れる。そして悪漢ブラウンの弁舌には、人間の暗い世界、「悪」といふべきものの存在が暗示され、それに対する二人の共通の体験と、人間としての共通の血縁が言及される。ジムにとつて、悪漢ブラウンは他人ではなく、もう一人の自分、「未知の自分」の顕現者になる。そこで、ジムの自己認識が徹底すると、それにより今までの夢想的な生き方が否定されるので、悪漢ブラウンの狡猾な活躍ぶりも印象的になる。彼が窮地を脱するためにとる戦略には、良かれ悪しかれ、夢も名誉も追わず、汚れた世界を行動で生きる者の、したたかな強さを感じられる。作家コンラッドが、盗みや裏切りを平気で犯すブラウンを、肯定しているわけではない。それでも、終結部における彼とジムとの同一視、また対比は見事なので、作品『ロード・ジム』の物語後半のだれを引き締め、作品の低俗化を救っているのは、

まさに、悪漢ブラウン登場とその存在感、およびその象徴性といつてよい。結局、続く交渉の場で、主人公ジムは的確な判断ができず、部族に災難をもたらす。それは部族の信頼を裏切るかたちとなり、彼は命を投げ捨てる。

作家コンラッドの海の物語群は、多かれ少なかれ、人間の成熟を扱っている。どの物語にも、主題の微妙な差は別として、立派な船乗りの条件は何か、といった問いかけが基調に流れている。そして、船上の世界が一つの共同社会である以上、立派な船乗りの資質は一人前の社会人の条件に通じてくる。作品『ロード・ジム』の場合、ものごとは主人公ジムの思考や行動を裏返せばよいのである。ここでは、ジムはまだ成熟以前の人間にすぎない。臆病で、自分勝手に、的確な判断力を持たない海の失格者は、幸運の助けがなければ、陸上でも失格者である。作品中の比喩を使うと、ジムという鳥はうまく飛び立ったものの、すぐに翼は折れ、地上をよたよた歩いて、死んでゆく。

人間の成熟とは、社会人としてのまともな生活、人生の力強い生き方を、当然のことながら含んでいる。作品『ロード・ジム』でも、主題はいわゆる人間開眼だが、問題は人生の「舵取り」だろう。未熟な主人公ジムにとつて、成熟への関門通過は、例えばマーチン・タッカーのことは借りれば、「醜い事実と残酷な人間で一杯の現実世界」への認識、そして自己の心中にも存在する、人間の暗い部分への認識如何にかかっている。それに、ものごとは人間の成熟度に応じてかなり異なる姿を示す。人生の「破壊的要素」——ジムの場合、バトナ号事件や悪漢ブラウンとの対決——も、その力は強くもなり、弱くもなる。成熟とは、ここでは、生きるための一つの防衛力、さらに積極的には、推進力の役割を果たしてくる。未熟な青年ジムの物語には、結局、その破壊の過程とともに、こういう成熟の意味、人生の堅実な生き方の暗示が並行する。そして、主人公のジムが比較的単純な人物でも、その純粹さと熱意が読者を彼の最期まで引き付ける。作品

『ロード・ジム』は、重層的で精巧な小説技法のもとに海の失格者とその行方を描いて、人間の本質を探り、人間の成熟の意味を問う傑作である。

註

テキストは Joseph Conrad : *Lord Jim*, (Dent's Collected Edition) (1923; rpt. London : J. M. Dent and Sons, 1968) を用いた。後註にちける頁数はされたもの。

(1) Joseph Conrad : *Lord Jim*, p. 10.

(2) *Ibid.*, Author's Note, p. viii.

(3) William Blackburn (ed.) : *Letters to William Blackwood and David S. Meldrum* (Durham, North Carolina : Duke University Press, 1958), pp. 21-22.

(4) Edward Garnett (ed.) : *Letters from Joseph Conrad* (New York : Bobbs-Merrill, 1962), p. 138.

(5) William Blackburn (ed.) : op. cit., p. 55.

(6) *Ibid.*, p. 79.

(7) *Ibid.*, p. 93.

(8) Albert J. Guerard : *Conrad, the Novelist* (Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1958), p. 145.

(9) Hugh Clifford : 'The Genius of Mr. Joseph Conrad', *North American Review*, CLXXVIII (June, 1904), in Thomas C. Moser (ed.) :

Joseph Conrad, Lord Jim (A Norton Critical Edition) (New York : W. W. Norton, 1968), p. 362.

(10) Norman Sherry : *Conrad's Eastern World* (Cambridge : Cambridge University Press, 1966), p. 43.

(11) Joseph Conrad : *Lord Jim*, p. 11.

(12) Eloise Knapp Hay : 'Lord Jim : From Sketch to Novel', *Comparative Literature*, II (Fall, 1960), in Thomas C. Moser (ed.) : op. cit., p. 421.

(13) Joseph Conrad : *Lord Jim*, p. 7.

(14) Albert J. Guerard : op. cit., p. 172.

(15) G. Jean-Aubry : *Joseph Conrad : Life & Letters* (2 vols. : London : Heinemann, 1927), II, p. 185.

- ㉞ *Ibid.*, II, p. 342.
- ㉟ Richard Curle : *Joseph Conrad, a Study* (London : Kegan Paul, 1914), p. 33.
- ㊱ Albert J. Guerard : op. cit., p. 168.
- ㊲ Joseph Conrad : *Lord Jim*, p. 344.
- ㊳ *Ibid.*, pp. 377-378.
- ㊴ *Ibid.*, p. 383.
- ㊵ *Ibid.*, pp. 382-383.
- ㊶ Martin Tucker : *Joseph Conrad* (Modern Literature Monographs) (New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1976), p. 15.